

中国語の「会」と「能」について
～弁別特徴PROCESS/RESULTからの用法の再整理～

高 橋 純
(地域文化学科)

島根県立大学松江キャンパス
研 究 紀 要

第 58 号
(61～68頁)別刷
2019年3月

中国語の「会」と「能」について ～弁別特徴PROCESS/RESULTからの用法の再整理～

高 橋 純
(地域文化学科)

On the Chinese Auxiliaries *Hui* and *Neng*: Re-examining their Usage from the Point of View of
the Distinctive Feature PROCESS/RESULT

Jun TAKAHASHI

キーワード： possible auxiliary 「会」「能」 弁別特徴 PROCESS/RESULT
potential auxiliary, *hui*, *neng*, distinctive feature, PROCESS/RESULT

0. はじめに

本稿では、中国語の possible auxiliary 「会」と「能」を類義語としてとらえ、その意味の違いを、Tobin (1993) を利用し、再整理する。

「会」と「能」の用法の違いについての論考はすでに多く存在し、議論も重ねられており、卓越した研究も存在するが、各々の語の用法に議論が集中し、この両者の使用範囲や派生の違いが、どのような理由によって生じているのかを説明しているものは、多くないと思われる。

そこで、本稿では、Tobin (1993) の記号指向的で、かつ不変的な意味に則った解釈を利用して、「会」と「能」両者の用法の範囲の差を、不変的な意味によるものと捉え、そこから用法の再整理を行うことを目的としている。

まず、第1節で、Tobin (1993) の基本的な理論を紹介し、2節で「会」と「能」両者の用法を、今までの研究をもとに、Tobin (1993) の理論で分析し、再整理する。

1. Tobin (1993) について

Tobin (1993) は、記号学的・記号指向的な接近法 (semiotic or sign-oriented approach) で英語の動詞の類義語を分析した研究である。この研究で提唱されている理論では、類義語の対立の中に **有標無標** 関係を考え、弁別特徴として PROCESS/RESULT という概念を設定している。そして、この PROCESS/RESULT は、「言語記号」と密接に結びついている不変の意味 (invariant meaning) の一部として考えられている。

弁別特徴である PROCESS/RESULT の関係は、以下のように規定されている¹⁾：

- (a) 有標形 (M) は、RESULT という特徴を要求する。つまり、1つの動作・状態・出来事は、結果・目標・帰結・終結・目的地・限界点を示す終点の観点からみられなければならない。その観点は、明示的に述べられたり、暗黙的に含意されたりしている。
- (b) 無標形 (U) は、意味特徴 RESULT を特に要求する必要がなく、またその特徴に対して中立的である。つまり、1つの動作・状

態・出来事は、RESULTの観点からでも、PROCESSの観点からでも、またPROCESSとRESULTの観点から見られても構わない。その観点は明示的に述べられたり、暗黙的に含意されたりしている。

つまり、このPROCESS/RESULTの関係は、非対称的であることが説明されており、以下の図1、図2のように表わされている。

Semantic substance	Form	Meaning
Aspect of action, state or event	x	UMMRKED FOR PROCESS/RESULT
	y	MARKED FOR RESULT

図1. PROCESS/RESULTの意味体系



図2. 有標無標関係

また次のようにも示されている：
(MARKED = RESULT) / (UNMARKED = PROCESS/RESULT)

そして、この非対称的な有標無標の意味関係は、弁別特徴RESULTが関わっている不変的な意味によって、その語のすべての用法に関与しているのである。

そこで、本稿では、Tobin（1993）に倣って、「能」と「会」を以下のように仮定する：

- 「能」は、有標形（MARKED）で、RESULTという特徴を要求し、動作・状態・出来事は、結果・目標・帰結・終結・目的地・限界点を示す終点の観点からみられなければならない。
- 「会」は、無標形（UNMARKED）で、意味

特徴RESULTを特に要求する必要がなく、またその特徴に対して中立的で、動作・状態・出来事は、RESULTの観点からでも、PROCESSの観点からでも、またPROCESSとRESULTの観点から見られても構わない。

図1、図2に当てはめた場合、 x に「会」が入り、 y に「能」が入ることになる。

この仮定に沿って、「能」と「会」の分析を行う。

2. 「会」と「能」の用法

中国語の可能表現は、「会」と「能」の助動詞があり、この2語のほかに、助動詞は「可以」がある。また可能補語を用いた用法もあげられるが、本稿では、「会」と「能」の「能力」や「上手い」、「可能性」など、用法が重なるところが少なくないことから、類義語と認め、この「会」と「能」を分析の対象とする。

2.1 「会」と「能」の類義用法

「会」と「能」の「可能」と「可能性」を表現する例で、「会」と「能」とともに用いることができる用法である。まず可能を意味する例である：

- （1）他 {会/能} 开汽车了「彼は自動車運転できるようになった」
- （2）她 {会/能} 用中文文字处理机，一分钟 {能/*会} 打八十多个汉字「彼女は中国語のワープロができ、1分間に80字余り打てる」

可能性を表す文としては、以下のようなものがあげられる：

- （3）下这么大雨，他 {会/能} 来吗？「こんな大雨が降っているのに、彼は来るのだろうか」
- （4）今天的棒球比赛，甲队说不定 {会/能} 赢「今日の野球の試合は甲チームがかつだろう」

このように最小対での入れ替えが可能であるところから、本稿ではこの「会」と「能」の両語を類義語であるとしている。

上記の例（1）～（4）は、『中日辞典（第三版）』

(小学館, 2016年)の「能」の項から引いてきたものであるが、(1)に関しては、「ある動作または技術がはじめてできるようになったこと(会得)を表すには“能”も“会”も用いることができるが、“会”のほうがより多く用いられる」とされ、(2)では、「ある能力を持っていることを表すには“能”も“会”も用いるが、具体的にどの程度まで達しているかを表すのには“能”しか用いることができない」としている。

そして、可能性の例(3)と(4)には、説明がない。

それでは、両者の用いられ方にどのような違いがあるのかを、今までの研究をもとに、PROCESS/RESULTの意味特徴を用いた有標無標関係で、再整理する。

2.2 「達成」に関して

まず初めに、(1)と(2)で扱った例文からはじめる。この用例は、「能」の「達成(状況が・・・というレベルまで達する)」(黄1995:79)を表す例としてよく取り上げられるものである。以下に類似の例をあげておく。²⁾

- (5) 张三一小时{能/?会}打一千多字。(張三は1時間に1000字あまり打てる)
- (6) 新干线一个小时能行210公里。(新幹線は1時間で210キロ走れる)
- (7) 举重运动员{能/?会}举起100公斤重的杠铃。(重量挙げの選手は100キロのバーベルを持ち上げられる)
- (8) 慢慢习惯了生食,现在{能/?会}吃生鱼片了。(だんだん生食にも慣れてきたので、今では刺身も食べられる)

これらの(2)と(5)～(7)は、動詞の動作の結果において可能な量が示されている。つまり、その量が記されていることで、可能な領域が明示され、際限なくできるという状態ではないことが示されている。このような意味で、RESULTを含んでいると考えられる。

また、数量的なものではないが、(8)などは、生食の到達点として「刺身」をあげ、そこまで達成

できたという意味になっているので、「目標・帰結」などを表しているため、RESULTの観点から表現されていると考えられる。そのため、これらの例では「能」が用いられているのだろう。

そして、(5)(7)(8)では、「会」で表すと不自然になる。「会」は、無標形でRESULTが中和されるか意識されていない表現であるため、領域などが設定されなければならないRESULTの観点が明確になっているものには用いられず、(5)(7)(8)のような文法判断になるのだろう。

しかし、その限度が明記されていない可能に関しては、「会」で表現される。相原(2015)から例をあげる。

(9) 我会说汉语。(中国語が話せる)(p.19)

(10) 你会游泳吗?(あなたは泳げますか)(p.11)

そして、上に示した(9)の例に関して、以下のように説明を加えている：

これも極端に言えば、“你好”(こんにちは)の一言が言えるだけでもかまわない。それで嘘をいったことにはならない。会話の授業などで、中国人の先生が日本人の学生に、
你会说汉语吗?(中語学が話せますか)
と尋ねると、学生は恥ずかしそうに、
我不会说。(話せません)
と答えてしまい、先生をカッカとさせることが少なくないと聞く。

つまり「会」は、そこに「結果・目標・帰結・終結・目的地・限界点を示す終点」の概念はなく、始まる部分だけが示されていれば用いることができることを示しており、無標形ということが言えるであろう。

また、勝川(2011:106f.)では、「会」を用いた可能表現は、「誰々はコレコレが(実現)デキル」といった「動作の実現」に焦点を当てた表現ではなく、「誰々はコレコレできる人物だ」といった主体の属性描写に焦点を当てた表現であり、主体の特性・特徴を可能範疇からとらえ、それを描写する表現であると考えられる」としている。つまり、その能力

はすでに身につけていて、その人に備わっている能力を描写しているのだから、「結果・目標・帰結・終結・目的地・限界点を示す終点」の観点を含む必要がないのである。

これと同様の例としてあげられるのが、以下の例ではないだろうか。

- (11) 鸟会飞。(鳥は空を飛べる)
- (12) 猫会捉老鼠。(猫はネズミを捕まえられる)
- (13) 老鼠生来{⁹⁹能/会}打洞。(ネズミは生まれつき穴が掘れる)

(11)(12)は相原(2015:15)、(13)は黄(1995:84)にあげられている例で、相原(2015)では「普通の動物であれば、時間の経過とともに自然に習得するような技術に“会”が使われる」と説明されているが、勝川(2011)の説明を使用すれば、その主体の属性描写ということで説明がつき、属性描写であるのなら、意味特徴のPROCESS/RESULTに関しても同様の説明がつけられ、「会」が用いられる理由の説明もつくのではないだろうか。

そして、相原(2015:12)で指摘している、こどもが成長するにつれて会得していく動作は、その始点に力点があるために、RESULTに対して中立である無標形の「会」が使用されるのだろう。

- (14) 孩子会爬了。(子供がハイハイできた)
- (15) 孩子会站了。(立てた)
- (16) 孩子会坐了。(座れた)
- (17) 孩子会走路了。(歩けるようになった)
- (18) 孩子会说话了。(話せた)

従来の説明では、「会」の用法として、「学習して習得した技術」と「種として自然と身につく技術」と別々の用法が併記されていたが、学習した技術と自然に身につく技術とでは、ずいぶんとかけ離れている印象がある。しかし、その動作が「結果・目標・帰結・終結・目的地・限界点を示す終点」を観点に入れる必要がないものとしてとらえられるのなら、これらの「会」の用法が無標形(M)の特徴に対して使用されるとまとめることができる。

2.3 意志性について

遅(2014:119)では、「能」と「会」の違いを、「意志性」の違いととらえ、「自然状態で「何々しようとする」という意志性は「自発」を表す“会”による可能文に見られるもので、力を尽くして可能状態を実現しようとする意志性は物事を「達成」するという過程を表す“能”による可能文に見られるものだ」としている。

この説明にも、「能」と「会」の有標無標関係が現れている。つまり、達成しようとするためには、その達成の終点(目標)に含まれるRESULTが意識されなければならない、それに対して、自発というのは、その状態の開始の部分だけが明確であれば、その状態を表現できるので、RESULTに対して中立的な表現であると言える。これは、前節の達成の説明と同様である。そして、遅(2014:117)では、意志性を示すために、複文を用いており、その例文が示唆的である。

- (19) 只有勇于挑战, 才能不断创新。(チャレンジを重ねていけば、絶えず新しいことを発見できるのです)

遅(2014)では、この従属文の意味を利用して、そこに意志性の根拠を表しているが、ここで使用される従属文の意味は、その「能」が用いられている達成のために行われている行為で、「能」が含まれる主文自体が結果として表現されているものである。つまり、意志性の有無は別として、「結果・目標・帰結・終結・目的地・限界点を示す終点」が表現されており、RESULTの意味特徴を必須とする「能」が使用されると説明できる。

そして、更に以下のような例が、相原(2015:38)でもあげられている。

- (20) 你继续努力吧, 一定能成功的。(努力を続けなさい、きっと成功するよ)
- (21) 你努力学习吧, 一定能考上北京大学。(頑張って勉強しなさい、きっと北京大学に合格するよ)

つまり、努力はもともと成功や北京大学に合格す

るために行っており、その努力の結果として、またその努力の行き着く先としての完成の形を述べたものである。「能」の条件文は、「能」で表される内容が条件から一直線に述べられ、「能」で表される内容を目的とした条件であるのではないだろうか。それゆえ、結果・目標・帰結・終結・目的地・限界点を示す終点の観点から表現されているため、「能」が用いられていると考えられる。

また、相原（2015:38）では、「能」の場合は、かくあって欲しいという人の積極的な願望がうかがえる」としているが、つまり願望の成就（目的）が果たされるという意味で、やはりRESULTな表現であると考えられる。

そして、条件が必ずしも、その直線的な関係にならない場合は、結果・目標・帰結・終結・目的地・限界点を示す終点が明確にならないため、有標形である「能」は用いられず、無標形である「会」が用いられることになるのだろう。

- (22) 不注意身体 { *能/会 } 感冒的。(体に気をつけないと風邪を引くぞ)
- (23) 这孩子父亲很坏，这孩子将来一定 { *能/会 } 像他的父亲。(この子の父親は非常に悪人だ。この子も将来きっとその悪い父親のようになるだろう)
- (24) 这孩子将来一定能像他的父亲那样出色。(この子は将来きっと父親のように立派な人になるだろう)

(22) ～ (24) は、黄（1995:86, 80）からの例で、その説明として、「「会」は「ことがらが自然に成立する」ということを表し、「達成」すなわち「困難の克服」という意味合いを含まない。「会」が望ましくない事柄の両方について用いることができるものそのためであろう」としているが、(22) の「不注意身体（体に気をつけない）」というのは、「風邪を引く」という目標（RESULT）のためにしていることではないため、「能」は用いられず「会」が用いられることが説明でき、また、(24) は目標への到達という意味では「能」が使用できるのではないだろうか。それでは、なぜ「会」が使用できるかと

いうと、それは、未来の予想を表すからで、未来はまだ行われていないためRESULTという特徴が持ちにくい「会」が使用されるのだろう。そして、(23) のように悪いことは、未然の事態であることと同時に、それを目標とするものではないので、「会」が使用できると考えられる。

2.4 「ある条件のもとでの生起」

蓋然性や可能性を表す「会」について、王（2015:141）は、仮説として「「ある条件のもとで、事態が生起する」と述べることであり」としている。これに関しては、仮説の内容の如何によるのではなく、「生起する」というところに注目したい。つまり、条件が整うことによって、ある事態が始まると読み替えても構わないと思われる。

王（2015:139）の例をあげる：

- (25) [冬の季節、ちょうど雪が降っている時に南国出身のBが雪国出身のAの故郷を初めて訪ね、二人は雪景色の中にいる]

A：我们这儿的冬天经常下雪，{ φ/*会 } 很漂亮吧？（ここでは冬によく雪が降ります。とてもきれいでしょ？）

B：是啊，我明年冬天还想来。（そうですね。来年の冬また来たいです）

- (26) [冬でない季節に、南国出身のBが雪国出身のAの故郷に初めて訪ねる]

A：我们这儿的冬天经常下雪，下雪时候 { φ/会 } 很漂亮。（ここでは冬によく雪が降ります。雪が降ると、とてもきれいになります）

B：那下次，我冬天的时候再来。（じゃ、次の冬の時に来ます）

そして上記の例文に関して、次のような説明を加えている³⁾：

(26) の場面では、雪景色の中ではなく、雪がない季節である。Aは「雪が降るという条件のもとで、ここが綺麗になる現象が起こる」ということをBに説明している。(25) と (26) を

比べて考えると、(25)のAは発話時現在この風景の性質は“很漂亮”であることを述べているのに対し、(26)はAは雪が降るという条件を満たすと、ここは“很漂亮”の性質を持つ風景が現象として起こるということを述べているのである。したがって、なぜ形容詞述語文に助動詞“会”を使うことができるかを考えると、それは形容詞述語文に、ある条件のもとで」という文脈を加えるときに、その形容詞が表している事物の性質、状態が現象として新しく生起するという意味が生じたからではないかと考えられる。つまり、“会”がない普通の形容詞述語文は、事物の性質や状態を描くのに対し、“会”で述べる形容詞述語文は、ある条件のもとでその形容詞が表す事物の性質、状態が現象として生起することを述べているのである。

このような説明からすると「会」は、始点に焦点を当てており、終点の特徴であるRESULTに対して中立的な立場であることがわかる。

また、条件文は得てして、発話時もしくは基準点よりよりも後の時間（未来）を表すことが多く、まだ起こっていない事柄を表現する。その意味で、RESULTという意味特徴を持ちにくく、「会」が使用されるのではないだろうか。そして、(23)は、ここに属するのではないだろうか。

2.5 頻度と巧拙の例

頻度と巧拙の例の差もこの有標無標関係から説明できる。

黄(1995:85)によれば、以下ようになる：

- (27) a. 张三特别会买东西。(張三は買い物上手だ)
 b. 张三特别能买东西。(張三はよく買い物する／たくさん買う)
- (28) a. 张三特别会走路。(張三は上手に歩く技術を身に着けている)
 b. 张三特别能走路。(張三はよく歩く／長い距離を歩く)
- (29) 能吃(よく食べる)／会吃(食べ物に凝っ

ている)

能说话(よく喋る)／会说话(話し方が巧みである)

能睡(よく眠る)

能叫(やたらと騒ぎ立てる)

「能」で頻度を表すのは、RESULTの観点から用いられており、その範囲が想起される。そのため、その行為1回1回が含意される。それに対して、「会」は、その行為自体を行う必要もなく、その可能性として述べればよいものであることから、その行為の質に言及する表現となると考えられる。これは、「2.2 達成に関して」のところでの説明と同様である。

2.6 指定詞について

黄(1995:85)に次のような例があげられている。

- (30) 这块布{能/*会}做西服。(この生地で背広が作れる)
- (31) 这块豆腐还{能/*会}吃吗?(この豆腐はまだ食べられますか)
- (32) 豆腐不吃{*能/会}放坏的。(豆腐は早く食べないと傷むよ)

これらの例は、主語(動詞の前の要素)に「这块」という指示詞+量詞の有無に関係しているのではないだろうか。

指示詞+量詞は、具体的な物(実態)を表しており、その具体的な物(30)(31)に関して、その可能性を述べるものである。それに対して、(32)は、豆腐というものは、「食べないと」と条件がついてはいるが、悪くなってしまう、という豆腐の傷みやすさという、その属性を表現しているのではないだろうか。⁴⁾

木村(2014:75)で「沈家煊(1995)では、無標の名詞表現(例えば、“桌子”)と数量詞を伴う表現(例えば、“一张桌子”)の対立を、“无界”と“有界”、すなわち非有界(unbounded)と有界(bounded)の対立と捉え」ていることに言及している。^{5) 6)}

木村(2014)では、この説を認知論的な解釈から否定しているが、このような語感を参考にすると、

RESULTとしての特徴が認められるのではないだろうか。

上の例文と一緒に (33) のような例も、黄 (1995:85) はあげている：

- (33) 这块布一洗{*能/会}缩水。(この生地は洗うと縮む)

この例 (33) は、(32) もそうであるが、条件文的な構造になっている。つまり、「この布を洗ったならば」が文内に含まれている。このように条件文については「2.3 意志性について」で説明したとおり、その条件は、主文の内容を目的とするものとはなりえないことによるのではないだろうか。つまり、洗うという行為は縮ませるためにする行為でなく、豆腐を食べないというのは腐らせるためではないからだろう。

2.7 補語について

藤井 (2011:62f.) によると、「能」の動詞部分には、結果／方向補語をとまなう場合が多いことが示唆されている。このこともまた、「能」がRESULTの観点から意識されたものであることから説明できるだろう。

2.8 予想外の内容

黄 (1995:81) にあげられている例であるが、予想に反する内容をなぜ「能」で表現することができるのだろうか。

- (34) 真没想到在这里能见到你。(まさかここで会えるとは思わなかった)
 (35) 真没想到我能落到这种地步。(自分がこんなに落ちぶれるとは思わなかった)

この例は、予想という範囲が設定されていることに関係あると思われる。つまり、予想という範囲内には存在しないことが起こったと解するべきであろう。このように考えると、その限界域が示されるところから、RESULTという特徴が必要となり、有標形の「能」が使用されるのだろう。

3. おわりに

以上、Tobin (1993) を用いて、「能」と「会」の意味特性について再整理を行ってきて、ある程度の範囲で、RESULT/PROCESSを意味特徴とした有標無標関係で説明できたと思われるが、更に中国語そのものの中の現象に引き付けた説明ができることが望ましいと思われる。

そこで、非常に示唆的なのが、木村 (2014, 2018) に示されている「概念」と「実体」の対立関係である。この「概念」と「実体」は、「会」と「能」の使用についていても説明できるのではないかと考えている。今後の課題として、中国語内部の現象をさらに加えながら、検討を続けていきたい。

【注】

1) この原文は、以下のとおりである。

- (a) The marked (M) form makes a specific claim for the future RESULT, i.e. an action, state or event must be viewed either from the point of view of a result, goal, consequence, conclusion, destination, telic endpoint, etc. which may be explicitly stated or implicitly implied.
 (b) The unmarked (U) form makes no specific claim or is neutral for the semantic feature RESULT, i.e. an action, state or event may be viewed either from the point of view of a PROCESS and/or RESULT which may be explicitly stated or implicitly implied.

2) ここに付されている文法判断は、各論文の著者に従っている。例文 (5) (6) は黄 (1995:84, 80) より、(7) (8) は遅 (2014:119) より引用している。

3) 王 (2015:139f.) より。この引用内の例文番号は、本稿のものに変えてある。

4) 「概念」と「実態」については、木村 (2014) を参照。

5) ここでの有標無標は、本稿の有標無標とは別の意味で使用されており、形態的なことを述べている。

- 6) 沈家煊 (1995) は未入手で、原文を読んでいない。

【参考文献】

- 相原 茂 (2015) 『読む中国語文法』 現代書館
- 王 其莉 (2015) 「中国語の“会”に関する一考察: 「I. 能力」「II. 長じる」でない第III類の“会”を中心に」『日中言語対照研究論集』 第17号 (日中対照言語学会) pp.135-153.
- 大河原康憲 (1997) 『中国語の諸相』 白帝社
- 勝川裕子 (2011) 「可能の助動詞“会”の表現機能と「上手い」への派生について」『中国語教育』 9, pp.101-114.
- 木村英樹 (2014) 「“指称”の機能」『中国語学』 261号, pp.64-82.
- (2018) 「中国語における「概念」と「実体」の文法対立」日本エドワード・サピア協会第33回研究発表会公演レジュメ
- 黄 麗華 (1995) 「中国語の可能表現「能」「可以」「会」」『日本語研究』 Vol.15 (東京都立大学国語学研究室)
- 遅 皎潔 (2014) 「現代日本語可能文における意志性と可能文の類型: 日本語の“会”文と“能”文との対照から」『日中言語対照研究論集』 第16号 (日中対照言語学会) pp.111-130.
- 沈 家煊 (1995) 「“有界”与 “无界”」『中国语文』 1995年第5期, pp.367-380.
- 北京・商務印書館／小学館 (2016) 『中日辞典 (第3版)』 小学館
- 藤井玲子 (2004) 「中国語初級学習者の可能表現の習得に関する縦断研究と誤用分析」『中国語教育』 2, pp.55-67.
- Tobin, Yishai (1993) *Aspect in the English Verb*. London & New York: Longman.

(受稿 平成30年11月19日, 受理 平成30年12月25日)